

自然誌 だより

Natural history

三重自然誌の会情報誌 149号

2026年 9月

モズのはやにえ

ときは2025年9月と少々さかのぼりますが、裏の畑でスズメがモズによる『はやにえ』にされているのを確認したので報告します(写真-1)。田舎に近い環境の我が家でははやにえを見ることはごく普通なのですが、ほとんどが小物？で、さすがにスズメという大物は初めてでした。そこで、これまで撮りためた写真の中からいくつか『はやにえ』を引っ張り出してみました。

まずはニホンアマガエル(写真-2)。うちでは庭の植木に毎日水やりをすることから普通に生息しています。次に多いのがニホンカナヘビ(写真-3)。この種も裏の茶畑を中心に沢山生息しています。そういえば、ニホントカゲも同様に生息していますが、はやにえは見えていないと思います。ニホントカゲの方がすばしっこく逃げ隠れするからでしょうか？少し珍しいなと思って写真に収めていたのはイモムシ(写真-4)。種の判別は不可能ですが、クルミの木ではヤママユが繁殖しますし、オビカレハの幼虫もよく見かけます。ここまではブナの木が中心です。ブナは翌年の芽の先端が鋭く尖ってるので獲物を刺すのに都合がいいのでしょう。最近、茶畑の畝の間を耕起して野菜を作り始めたのですが、増えてきて困っているのがカメムシ！その一種であるツヤアオカメムシも餌食になっていました(写真-5)。カメムシの臭い攻撃もモズには効かないのでしょうか。カメムシは柿の木、スズメはプラムの木での確認です。また、熊野市井戸町での記録ではトビズムカデ(写真-6)というのもありました。

よく話題になりそうなのははやにえですが、これまでの本誌総目次で表題検索したところ、2017年3月発行の111号で伊賀市の浅名正昌さんが「今風モズの速贄」と題して寄稿されています。そこでは水生昆虫のものもありました。また偶然同号に、篠木善重さんのハマボウの話題の中でヒメアシハラガニのはやにえの写真もありました。モズの生息地によりはやにえも様々ですね。



写真-1.スズメ, 2.ニホンアマガエル, 3.ニホンカナヘビ, 4.イモムシsp., 5.ツヤアオカメムシ, 6.トビズムカデ

(上田利彦：津市久居一色町176-1)

シマリスはいつから御池岳周辺に定着したのか？

—文献記録の掘り起こし—

佐 野 明

外来哺乳類シマリス *Tamias sibiricus* (図1) は、三重県いなべ市と滋賀県東近江市にまたがる御池岳周辺 (図2) にすでに定着しています (清水 2015; 矢崎 2018)。その愛らしさから、山歩きを楽しむ人たちの間では人気者になっており、彼らとの遭遇を楽しみに御池岳に登る人も少なくないようです (坂 2018; 清水 2023)。御池岳周辺のシマリスは、真の谷 (滋賀県東近江市) において1997年10月に目撃・撮影されたのが最初で (注1)、三重県側ではコグルミ谷で2007年6月に目撃されたのが最も古い記録とされています (清水 2015; 清水ら 2018)。



図1 コグルミ谷 (三重県いなべ市) で見かけたシマリス (2022年5月22日撮影)



図2 御池岳 (コグルミ谷, 真の谷, 冷川谷, 幸助の池) 位置図 (国土地理院地図をもとに作成)

しかし、筆者は藤原岳自然科学館収蔵の文献を調べる中、藤原岳自然探査会 (以下、探査会) が刊行する会報「Adonis」49号に、1994年4月17日に真の谷で目撃したとの記録 (山田 1994) が掲載されているのを見つけました。シマリスを発見し報告したのは当時、Adonis の編集を担当し、探査会が主催する観察会等で御池岳に何度も登っていた山田明男氏で、当日の観察会記録として「13時30分に真の谷に出たが、少し上流に歩いた所でシマリスを目撃、あまり人に出会っていないのか逃げる様子がなく、しばらく観察できました。シマリスは小生初めて見ました。」と書いています。

また、山田氏は、1998年に刊行された Adonis 66号でも、同年7月5日の観察会記録として「尾根へ戻って幸助の池へ向かいまして、池では又もシジミを探し見てもらいました。池の横の木に登るリスが見られ、よく見るとシマリスでした。4年前から真の谷で確認しているシマリスですが、冷川谷 (三重県いなべ市=著者補注) でも今年確認していますし、だんだんと確認した範囲が広がってきています。」と報告しています (山田 1998)。

これらの情報を総合すると、御池岳周辺でシマリスが見られるようになったのは1994年以前であり、三重県側でも少なくとも1998年には見られたということになります。

三重県の野生動物に関する文献を集めてきたつもりですが、これまで「Adonis」に目を通したことはありませんでした。それは「知らなかった貴重な情報」に溢れていました。今回、ネットでは閲覧できない古い文献探索の重要性和楽しさを痛感しました。文献調査にご協力くださったいなべ市教育委員会自然学習室の矢崎充彦氏にお礼申し上げます。

注1：富田（2000）には1987年5月に西井千佳氏によって真の谷でシマリスが観察・撮影されたとの記載があるが、これは誤記であったことを著者の故富田靖男氏に確認している。

引用文献

- 坂 美幸. 2018. シマリスと野花に癒される鈴鹿山脈の最高峰. Nagi, (74):14-19.
清水善吉. 2015. 御池岳コグルミ谷でシマリスを見る. 自然誌だより, (105):7.
清水善吉. 2023. 可愛いシマリス. 自然誌だより, (138):1.
清水善吉・富田靖男・上田利彦. 2018. 三重県の哺乳類・爬虫類・両生類. みえ生物誌哺乳・爬虫・両生類, 鳥類 (三重自然誌の会, 編), pp.1-102. 三重自然誌の会, 松阪.
富田靖男. 2000. 三重県の陸産哺乳類 (Ⅱ). 三重県環境保全事業団研究報告, (6):23-47.
山田明男. 1994. 94年2回目の御池岳めぐり. Adonis (藤原岳自然探査会会報), (49):17-20.
山田明男. 1998. 特別例会御池岳・奥の平へ. Adonis (藤原岳自然探査会会報), (66):12-13.
矢崎充彦. 2018. いなべ市藤原町周辺における哺乳類の記録. 藤原岳自然科学館館報 藤原岳, 40:9-17.

(さの あきら：津市河辺町)

池ノ谷のモリアオガエル2026

宮 島 美 栄

昨今の気候変動の影響を、紀伊半島最大のモリアオガエルの繁殖池・池ノ谷（大台町）で、カエル達の産卵数を通して観察を続けている。今年で6年目だ。昨年（2025年）爆発的な個体数増に伴い大量の卵塊数を確認した。そして、今年はその反動で激減するであろうと昨年の段階で予想していた。果たして、如何に。

先ず、今春は菜種梅雨がしっかりあった。4月末時点で池はほぼ満水状態（写真1）。ただ、5月が非常に暑くなり、欧州でも熱波が襲い、地球規模で異常な5月となり、池ノ谷の水も干上がった。5月20日、当然卵塊は一個も見られない（写真2）。そしてまた6月初めに台風が襲来する、という異常事態。6月5日、雨、卵塊数295個（写真3）、台風6号が去ってからも三重県の南半分（東紀州地域）は雨が続いた。表1に示した2026年6月の降水量でも分かるように、台風の影響もあるが平年値の倍以上である。6月10日、梅雨の晴れ間、卵塊数433個（写真4）。6月13日、この日も晴れたが、産卵はピークを過ぎており卵塊数277個。結果として、今年の卵塊数の最大は433個であった。

ここ6年、毎年1年の前半分の気象の変化を観てきたが、毎年想定外の異常な気象現象が起こる。温暖化で年々夏は猛暑酷暑となり毎年最高気温を更新していく、という単純な事ばかりではない。早春の頃異常に暖かかったり、4月5月が急に暑くなりいきなり真夏になったり、梅雨が7月前に明けてしまったり、と複合的に異常な現象が重なり、全体を通した平均値で気温は確実に上昇傾向になっている。降水量も同様で、全然降らなかったり極端に降ったりの平均値でもって、増加傾向だ。

今夏も異常気象が続いている、7月から各地で40℃を超える酷暑日が連続し、8月には台風が東から西に進行し茨城県に上陸して九州に向かう、という、気象台が統計を



写真1 ほぼ満水の池ノ谷（4月29日）

とり始めて「初」の記録が今年も後を絶たない。私も「初」を確認した。毎年必ず立秋（8月8日）の頃鳴き始めるツクツクボウシが、今年は7月27日に鳴いた。

カエルたちはこの毎年続く異常事態をどう乗り切るのだろう、そして来年の卵はまた復活してくれるだろうか。難しい気がする。7月の猛暑で今年生まれた若いカエルたちの多くが死んでしまったかもしれないからだ。来年もカエルたちの奮闘を祈り観測を続けていきたい。

表1 紀伊長島の気象データと産卵数の経年変化（2021-2026）

		1月	2月	3月	4月	5月	6月
平年値 (1990-2020)	気温	6.2	6.9	9.8	14.3	18.3	21.6
	降水量	70.9	80	164.3	207.3	253.4	312.9
2021	気温	6.4	8.7	12.5	14.6	18.3	21.8
	降水量	76.5	136	406.5	310	280	231
	卵数	初確認日：5/18 30個 ピーク日：6/5 最終報告数：656個					
2022	気温	5.9	5.8	11.3	16	18.5	22.3
	降水量	20.5	25.5	154	279	214.5	310
	卵数	初確認日：5/16 30個 ピーク日：6/7 最終報告数：613個					
2023	気温	6.3	7.9	12.3	15.7	18.8	22.4
	降水量	25.5	26	196	187.5	228	570
	卵数	初確認日：5/22 15個 ピーク日：6/14 最終報告数：428個					
2024	気温	7.4	9.4	9.9	16.6	18.6	22.3
	降水量	152.5	195	306.5	234.5	217.5	307
	卵数	初確認日：5/31 240個 ピーク日：6/26 最終報告数：406個					
2025	気温	6.6	5.4	11.3	15.3	18.8	23.5
	降水量	29	20	126.5	113	403	194
	卵数	初確認日：5/28 299個 ピーク日：6/15 最終報告数：1137個					
2026	気温	5.4	8.1	11.1	15.8	19.3	21.6
	降水量	0	36.5	168.5	322.5	191.5	757
	卵数	初確認日：6/5 295個 ピーク日：6/10 最終報告数：433個					



写真2 池の水はほとんどなくなった（5月20日）



写真3 台風6号襲来後の池ノ谷（6月5日）



写真4 今年の産卵のピーク（6月10日）

（みやしま みえ：大台町上三瀬52-1）

赤目四十八滝でアオダイショウによるモモンガの捕獲を目撃

清水 善吉 ・ 大沼 弘一

オオサンショウウオ調査のために目的地に向かって夜の赤目四十八滝の歩道を歩いていると、前方に微妙に動く塊を発見しました。場所は岩窟滝と琵琶滝の間、標高約490m、一帯は壮齢のスギ人工林とモミや落葉広葉樹の自然林が混在し（写真1）、行政区は奈良県宇陀市室生龍口（滝川を挟んで左岸は奈良県、右岸は三重県）、2026年8月9日20時頃のことです。近づいてみるとアオダイショウにつかまったニホンモモンガ（以下、モモンガ）でした（写真2）。モモンガはアオダイショウに半身を締めつけられており、その表情は虚ろ、落ちる寸前の状態のように思えました。

ところが、調査員が変わるがわる写真を撮っていると、アオダイショウの方が身の危険を感じたようで、一瞬締めつけを緩めたすきにモモンガがすりと抜け出し、近くの樹幹を駆け上って行きました。アオダイショウにとっては、せっかくご馳走をつかまえたのに人に邪魔をされた格好であり、モモンガは命拾いしたことになります。我々が通りかかることがなかったら、状況からみてモモンガは間違いなく餌となっていたでしょう。さて、この観察には「初記録」がいくつかあります。

まず、アオダイショウの餌動物に関して、北海道に生息するタイリクモモンガがアオダイショウに捕食された記録はありますが、ニホンモモンガについては他の蛇類による事例も含めて初記録です（浜中他2014. 爬虫両棲類学会報,2014,Akira Mori and Hajime Moriguchi 1988. The SNAKE,20）。そもそも、アオダイショウはどのようにして樹上性のモモンガを捕獲したのでしょうか。アオダイショウも木に登りますが、樹上での動きはモモンガの方が優れているように思われますので、樹洞内の巣で休息中に襲われたのかもしれませんが、夜7時には暗くなりモモンガも巣を出て活動を始めますので、それまでに捕まって1時間ほど締め付けられていたことになります。

次に、分布上の記録についてです。モモンガの記録は、宇陀市からは初めて（高野・鳥居2017, 奈良県レッドデータブック2016改訂版）、対岸の名張市でも未確認です（清水2026, 三重県レッドデータブック2025）。ただ、モモンガが県境を意識して行動することはないでしょうから（写真1）、名張市側にも生息することは確実です。赤目四十八滝は布引山地と高見山地のあいだにある室生山地に属しており、当山地におけるモモンガの確認は初記録です。三重県では鈴鹿・布引・高見・紀伊山地で記録がありましたが、この確認により、本種は三重県側では鈴鹿から紀伊山地まで連続した分布域をもつことが判明しました。各産地での確認は1～数例、全体でも10地点以下の記録に留まりますが（清水他2018, みえ生物誌—哺乳・爬虫・両生類, 鳥類）、そのほとんどが今回のような偶発的な発見状況からすると、調査を実施すれば案外多く生息しているように思います。

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17・おおぬま ひろかず：兵庫県自然保護協会）



写真1 目撃地点の環境。滝川をはさんで右手が名張、左手が宇陀市。宇陀市側の歩道上で確認。



写真2 アオダイショウに捕まったモモンガ（2026年8月9日、宇陀市）

櫛田川中流域，4月中旬の花と虫

篠木 善重 ・ 井元 俊介

筆者らは、今春4月17日に松阪市射和町と庄町の櫛田川中流域の左岸へ出向いた。庄町は、中村ら（2015）が県下で初めてカスミハネカ（双翅目）の生息を報告した場所であり、Saigusa・Sinclair(2016)が2種類のケミヤクシブキバエ（双翅目オドリバエ科）の模式産地とした地でもある。三枝豊平九大名誉教授と中村剛之弘前大学教授から四季を通じて当地の生物調査をしてくださいと進言していただいた環境なのである。そこで、少し珍しい生き物の生態を観察しようと意気込んで歩き回った。その日に会った生物を報告する。

1. ヤセウツボ *Orobanche minor* (写真1) 射和町，採集標本なし，井元同定。

ハマウツボ科の一年草で寄生植物，地中海沿岸原産の外来種。

2. アオサナエ *Nihonogomphus viridis* 羽化殻 (写真2) 庄町，井元採集，篠木同定。

トンボ目サナエトンボ科。体長約31mm 翅芽は「八」の字状に大きく開き，腹部に瘤状の背棘が並び，側棘は鉤状で良く尖り第2-9腹節にある(尾園ほか2019)。幼虫は流れの緩やかな砂礫の交じった環境でよく見られる。庄町櫛田川では，1995年に八木孝彦氏が本種の幼虫を見つけていて（八木2013），それ以来の記録となる。

3. マミジロノミバッタ *Xya leucophrys* 射和町，1♂ (写真3) 1♀ (体長約5mm)，篠木採集同定。

バッタ目ノミバッタ科。雌の方が体長，後脚の腿節長さなどが大きい。和名は，複眼の内側に少し太めの白線が伸び，眉のように見えることに由来する。県内初記録は篠木（2018）によるもので，それによると双翅目談話会が櫛田川で実施した双翅目調査会において，故春澤圭太郎氏が射和町の砂場のある河川敷で4♂2♀を採集したものという。本種が新種記載(Sato・Ichikawa 2020)される前の話である。バッタ目の県初記録を双翅目専門誌で報告するにあたって，河北 均氏に事前確認を入れ，構わないとの承諾をいただいている。三重県レッドデータブック2025（河北2026）において情報不足種に選定された。なお，少し大型で普通種のノミバッタ *Xya japonica* の生息は櫛田川では確認できていない。

4. オオハサミムシ *Labidura riparia* 庄町，1♀ (体長約30mm，写真4)，井元採集，篠木同定。

ハサミムシ目オオハサミムシ科。

5. クロコウスバカゲロウ *Myrmeleon bore* 庄町，3幼虫 (写真5)，井元採集，篠木同定。

アミメカゲロウ目ウスバカゲロウ科。幼虫（アリジゴク）は頭部背面の暗色部が目立つ種で，松林のある砂浜や河川敷の砂場に巣穴を作る(池田・



写真1 ヤセウツボ



写真2 アオサナエ羽化殻



写真3 マミジロノミバッタ♂



写真4 オオハサミムシ♀

奥井, 2017)。巣穴を見つけた篠木も何度か採集を試みたが、すべて失敗した。

6. キシタトゲシリアゲ *Panorpa fulvicaudaria* 庄町, 1♀ (写真6), 篠木採集同定。

シリアゲムシ目シリアゲムシ科。松阪市からの記録は、柚原町の蘭神社で1979年に故大川親雄氏が採集した1頭 (大川, 2001) 以来のものとなる。

7. ヒシカミキリ *Microlera ptinoides* 庄町, 1頭 (体長約4mm, 写真7), 井元採集, 篠木同定。

コウチュウ目カミキリムシ科。日本各地に生息する普通種だが、小型種のためか県内の記録はさほど多くはなく、松阪市からの記録となると、1957年に飯高町蓮 (中根1959) で採れて以来の2例目で67年振りとなる。

8. カワラムシヒキ (ロクロウヒラズムシヒキ *Lasiopogon rokuroi*) 射和町, 1♂ (体長約8mm, 写真8) 1♀, 篠木採集同定。

双翅目ムシヒキアブ科。砂浜海岸や下流域の河川敷では見かけない。櫛田川では、交尾器が異なる近似の未記載種も同所的に生息している (篠木, 2018)。

9. ヤマトツルギアブ *Dialineura albata* 庄町, 1♀ (写真9), 篠木採集同定。

双翅目ツルギアブ科。4月から6月初旬に砂浜海岸や河川敷の砂場で見つける種で、ツルギアブ科の中では最も容易く同定できる。♂の複眼は合眼的。

10. ムナギンクロバエ *Morinia argenticincta* 庄町, 1♀ (写真10), 篠木採集同定。

双翅目クロバエ科。松阪市初記録。♂の複眼は合眼的で、胸の銀色も無い。翅の前縁や翅脈周辺部は暗褐色を帯びる。

川の砂州や岸辺の砂場の様子は10年前とは大きく様変わりしていた。堤防から川岸に近づく動線がなかなか見つけられなかった。残念ながら当初に目論んでいた生物には出会えなかったが、10種の生物を確認できた。

文献

- 池田 大・奥井かおり. 2017. 兵庫県のカミキリムシ. きべりはむし, 40 (1): 14-30.
河北 均. 2026. マミジロノミバツ. p.292, 三重県レッドデータブック2025, 三重県.
中村剛之・加藤大智・三枝豊平. 2015. 三重県, 徳島県におけるカスミハネカの記録, 三重県総合博物館研究紀要, (1): 23-24.
中根敏勝. 1959. 飯南郡森村附近のカミキリムシ. ひらくら, 3(7):85-88.
尾園暁・川島逸郎・二橋亮. 2019. ヤゴハンドブック. 文一総合出版, 東京.
大川親雄. 2001. 三重県産長翅目録 第2報. ひらくら, 45(2):30-32.
Saigusa, T., Sinclair, B. J. 2016. Revision of the Japanese species of *Trichoclinocera* Collin (Diptera: Empididae: Clinocerinae). Zootaxa, 4103(3):201-229.
Sato, R. and Ichikawa, A. 2020. A new species of the genus *Xya* Latreille, 1809 (Orthoptera: Tridactyloidea: Tridactylidae) from Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, 26(2):290-293.
篠木善重. 2018. 櫛田川調査会報告. はなあぶ, (46):56-61.
八木孝彦. 2013. 三重県のトンボ記録(6). ひらくら, 57(2):25-38.



写真5 クロコウスバカゲロウ幼虫の頭部背面と腹面(別個体)



写真6 キシタトゲシリアゲ♀



写真7 ヒシカミキリ



写真8 カワラムシヒキ♂



写真9 ヤマトツルギアブ♀



写真10 ムナギンクロバエ♀

(しのぎ よししげ: 津市河芸町中別保2230-1・いもと しゅんすけ: 大杉谷自然学校)

南伊勢町道行竈のハマナツメ群落を訪れて

2026年7月31日、南伊勢町道行竈字塩竈にある県指定天然記念物『ハマナツメ群落』を訪れました。塩竈浜の背後地にある海跡湖の湖岸に広がる県内有数のハマナツメの群落で、1995年の調査では365株のハマナツメが確認されています(山本2008. 自然誌だより, 77号)。『ハマナツメ群落』に行くには、峠道を30分ほど歩く必要があります。気温35℃の中をハイペースで歩いたので、海跡湖に到着した時には疲労感を感じました。

海跡湖の周りにはススキなどの草本植物が繁茂していた記憶はあるのですが、ハマナツメ以外の植物はほとんどなく見通しの良さに驚きました。また、長らく降雨がないためでしょうか水位は低く、海跡湖内を容易に歩くことができました(写真1)。塩竈浜側の南東部には、枯死して幹だけになったハマナツメやハマゴウがありました(写真2)。

海岸に打上げられた貝を拾うために海跡湖の南側から塩竈浜に出ましたが、貝は皆無で流木と発泡スチロール等のゴミばかりが目立ちました。熱せられた礫浜を長靴で少し歩いてだけで足の甲が焼けるような痛さを感じます。早々に貝殻拾いを切り上げ、海跡湖の北側に移動してハマナツメを観察すると、淡い黄色の花を咲かせていました(写真3)。また、水際にはシカ等の足跡やヌタ場のほか、大きな二枚貝の死殻が目に入りました。拾い上げるとヤマトシジミです。生きた個体は確認できませんでしたが、両殻が揃った状態の新鮮な死殻を5個体と、最も大きいと思われる片殻だけの個体を拾いました。両殻が揃った5個体の平均の殻長と殻幅は、それぞれ38.22mm, 31.04mmで、まずまずの大きさがありました。最大のものは45.66mm, 37.03mmでした(写真4)。

(中野 環: 度会町大野木1711-1)



写真1 海跡湖とハマナツメ群落



写真2 幹だけになったハマナツメやハマゴウ



写真3 ハマナツメの花



写真4 ヤマトシジミ

編集後記

40数年前三重に戻って、最初に親しくしてもらったのが藤原岳自然探査会の方々でした。にもかかわらず、みえ生物誌編纂の文献調査に際して同会の会報を見落としていたのは情けない限りです。貴重な資料に光をあてられた佐野明さんには感謝です。次号は12月発行(善)。

自然誌だより149号 Mie Natural History Research Group News, No.149

発行日 2026年9月18日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail: shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp